

古墳からみた5・6世紀の山城地方

飛野 博文

1 はじめに

京都が千年の古都であるとはすでに幾度も言い古されてきた言葉である。しかし、千年の古都は、それ以前の数万年にわたる悠久の時間を歩んできた人間の生活を明らかにすることを阻んでいる。この小稿で取り扱う古墳というモニュメントに限れば、平安京に先立つ平城京や長岡京において、すでに京城開発にともなって削平された古墳が少なからず知られている。平安京ではそのような確実な例を知らないが、東山区^{ろくろ}轆轤町遺跡で埴輪が採集されており⁽¹⁾、今回報告した京都大学教養部構内A P22区検出の古墳群も、すでに10世紀ごろには墓地として認識されていなかった(第I部第2章)。周辺部においても、右京区の蛇塚古墳⁽²⁾、^{うずまさ}太秦馬塚古墳⁽³⁾、清水山古墳⁽⁴⁾、段ノ山古墳⁽⁵⁾などの首長墓級の前方後円墳が、正確な規模や副葬品など不明のままに半壊・消滅の状態にある。平安京遷都以降、平安京およびその周辺の開発はめざましく、京内外の古墳は絶えず破壊と消滅の危機にさらされているのである。

さて、京都の古代を語るとき、秦氏の存在は切り離せない。5世紀ごろ朝鮮半島から渡来してきた人々は、土木・石工技術などの実利的な新技術や文字などの新しい文化を携え、わが国の国家形成に大きく貢献するとともに支配体制の中核近くに位置していた。そうした渡来人の中で、秦氏は山城国太秦・深草を中心として全国各地に定住し、勢力を伸長していったといわれている。文献からみた秦氏の山城への定着は5世紀後半ごろといわれている⁽⁶⁾。考古学的にみた場合にも、5世紀中葉から6世紀前半にかけての山城における古墳の動向には大きな変化があり、この変化の原因を秦氏の進出に求めることもできよう。その傍証として、遺物の面ではわずかに6世紀末葉の右京区南天塚古墳(大覚寺3号墳)から新羅系の台付長頸壺が出土しているのみである⁽⁷⁾。そこで、本稿は、大きな転機があるといわれている、5世紀から6世紀にかけての京都盆地およびその周辺の古墳の動向を、秦氏進出の問題と関係付けながら、再確認しようとするものである。

2 山城における5・6世紀の主要古墳

ここでは、主に前方後円墳の消長について、5世紀の前葉・中葉・後葉、6世紀前葉の各期にわけて説明する。従って、墳形は特記しない。また規模は墳長を示す。

5世紀前葉 この段階の古墳の分布は大きく3つのブロックにわかれる。第1は向日丘

陵の南麓、乙訓郡であり、次に綴喜郡の男山丘陵南部、久世郡の宇治丘陵である。乙訓郡では近年発見され、伝日葉酢媛陵出土の方格規矩鏡と同類の鏡片を出土した74mの今里車塚古墳⁽⁸⁾があり、男山丘陵では、66mの前方後方墳である大住車塚古墳⁽⁹⁾、堅穴式石室から石製品などを出土したといわれている65mの大住南塚古墳⁽¹⁰⁾がある。宇治丘陵は当時、山城で最も大きな勢力を有していたと考えられ、それは久津川車塚古墳⁽¹¹⁾に象徴される。墳長156mのこの古墳は、明治27年、国鉄奈良線敷設工事中に石棺を露出した。その後、大正4年に梅原末治によって調査され、舶載唐草文帯四神四獣鏡、同画文帯神獸鏡、仿製三角縁神獸鏡など7面の鏡鑑、三角板革綴短甲5領や多くの滑石製品などを長持形石棺の内外で検出した。この古墳は周濠を含めた規模が219mにも及ぶ、山城最大の古墳である。久津川車塚古墳の北方には、近い時期に比定されている118mの芭蕉塚古墳⁽¹²⁾、南西には前方部から仿製三角縁神獸鏡や画文帯環状乳神獸鏡などを出土したと伝える箱塚古墳⁽¹³⁾がかつて存在していた。

これら3地域のほかには、紀伊郡(現伏見区)に詳細の不明な黄金山1号・2号墳⁽¹⁴⁾がある。標高40mの丘陵端部に近接して築かれた古墳で、1号墳は100m、2号墳は120mの規模をもつ。2号墳は、伊豫親王巨幡墓として宮内庁が後円部墳頂を管轄しており、1974年度に一部調査され、また、82年には京都府埋蔵文化財調査研究センターによるトレンチ調査がおこなわれた。2回の調査で、小札や若干の鉄製品、埴輪などを検出し、4世紀末葉から5世紀前半に比定されている有力な古墳⁽¹⁵⁾である。1号墳の遺物は知られておらず、墳形から推して5世紀の中葉頃に位置付けられている。

5世紀中葉 代表的な古墳は乙訓郡の恵解山古墳⁽¹⁶⁾である。墳長120m、周溝幅約30mの規模をもつ。後円部の埋葬主体は不明であるが、前方部に埋納された幅0.9m、長さ6.5mの木櫃と推定される一郭から、700点に近い鉄製利器を検出したことは耳新しい。その後、1982年におこなわれた前方部東南120mの地点の調査で、TK73型式の須恵器を検出した。報告者は、須恵器の出土した自然流路を恵解山古墳の周濠から流出していたと考え、須恵器は古墳に関係する遺物とした。同じく全長32mの芝1号墳⁽¹⁷⁾も同時期と考えられている。綴喜郡内に当該期の前方後円墳は知られておらず、小型仿製鏡を主体とする13面の鏡鑑や銅鏃などを粘土槨から出土した、径60mの円墳と推定される美濃山王塚古墳⁽¹⁸⁾がもっとも有力な古墳である。また、宇治丘陵においては、実態不明の寺山古墳⁽¹⁹⁾を除けば、仿製鏡2面や横剣板革綴短甲などを出土した、全長49mの前方後方墳に復原されるという青塚古墳⁽²⁰⁾のほかには有力な古墳はない。以上のほかには、先述した実態不明な黄金山1号墳がある。

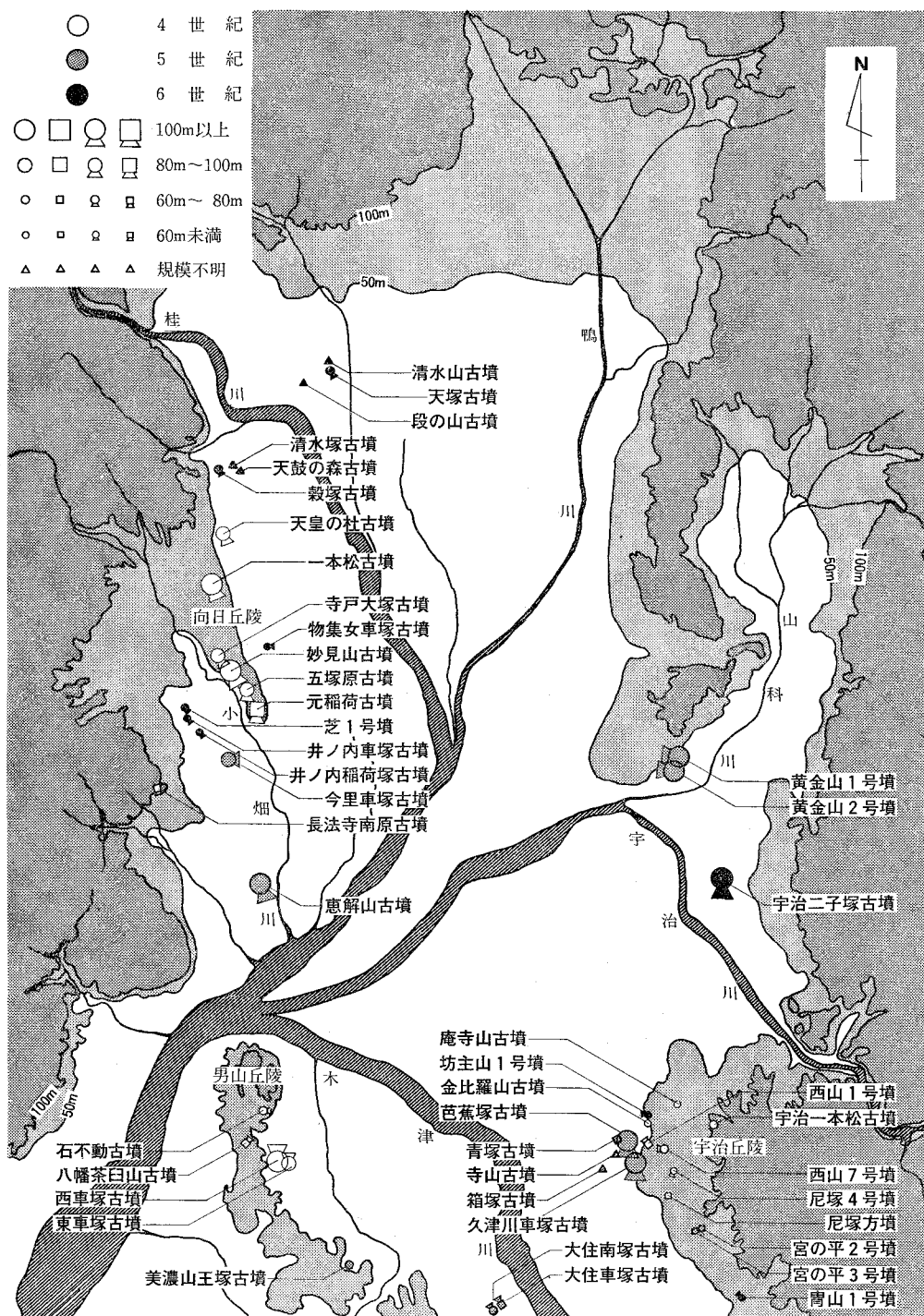


図69 5世紀後半～6世紀中葉の京都盆地の主要古墳 縮尺15万分の1

5世紀後葉 向日丘陵に新たな変化が生じる。それまで小畑川流域を中心に造営されていた古墳が、桂川右岸に新たに進出する。全長40mの穀塚古墳⁽²¹⁾は竪穴式石室から、帯金具をはじめとする豊富な遺物を出土している。卑近な距離に築かれた清水塚古墳⁽²²⁾、天鼓の森古墳⁽²³⁾も相前後して築造されたものであろうが、墳丘の形状や副葬品など不明なままに消滅してしまった現在では、時期を確定することは難しい。この段階では、乙訓郡に有力な古墳を見出すことはできない。男山丘陵では美濃山王塚古墳を最後に、大規模な古墳は築造されなくなり、また、宇治丘陵でもこの時期には、一辺35mの方形墳で2方向に造り出しを付す特異な形態をもつ宮ノ平2号墳、全長38mの帆立貝式前方後円墳の宮ノ平3号墳⁽²⁴⁾が築かれるに過ぎない。

6世紀前葉 乙訓郡では、墳長45mで部分的に周濠をもち、組合式家形石棺を納めた横穴式石室を内部主体にもつ物集女車塚古墳⁽²⁵⁾、38mの井ノ内車塚古墳や45mの井ノ内稻荷塚古墳⁽²⁶⁾などが築造されている。一方、男山丘陵では前段階に引き続いて有力な古墳の造営は確認されていないが、宇治丘陵では久津川古墳群の営なまれた地域に全長30mの冑山1号墳⁽²⁷⁾や45mの坊主山1号墳⁽²⁸⁾が立地し、さらにそれまで空白地帯であった宇治市木幡の地に、全長105mの宇治二子塚古墳⁽²⁹⁾が現われる。一方、桂川左岸の太秦には、この段階までにすでに前方後円墳が出現していた。遺物から確認される最古の例は、墳長約70m、周囲に約20mの濠を繞らせていた天塚古墳⁽³⁰⁾である。古く、1921年に調査され、後円部にある2基の横穴式石室から仿製鏡3面のほかに、須恵器、馬具、武具など多くの遺物を出土したが、当時の報文に列記された出土品は散佚しており、現在では、1933年に京都大学文学部博物館⁽³¹⁾に寄贈された若干の遺物があるに過ぎない。そのうちの須恵器器台・壺の実測図を示す(図70-1・2)。器台は、口径45cm余、器高55cmに及ぶ大型品で、受部は浅く、その端部は内彎気味に肥厚する。脚部は5段の装飾帯をもち、各部にカキ目を施した後に櫛描波状文を施している。透孔は三角形を重ね、最上段に長方形を配するもので、縦一列に3単位穿つ。壺は広口壺で、口縁端部は外反気味に丸く終わる。頸部の櫛描波状文は、緻密であるが、稚拙なものである。また、底部周縁には鈍い段が観察できる。両者ともにカキ目の手法が著しく、また、多く用いられている凹線文は鈍く、条数を数えることも困難なものである。この須恵器は6世紀の前半代に比定されるものである。この天塚古墳に先行するものとして、全長60mの清水山古墳、推定75m以上の段の山古墳が挙げられている。両者とも十分な資料もないままに現在は消滅してしまっているが、墳丘の形態や立地から天塚古墳に先立ち、5世紀後半頃から築造の始まった一連の系譜の中に数えられている。

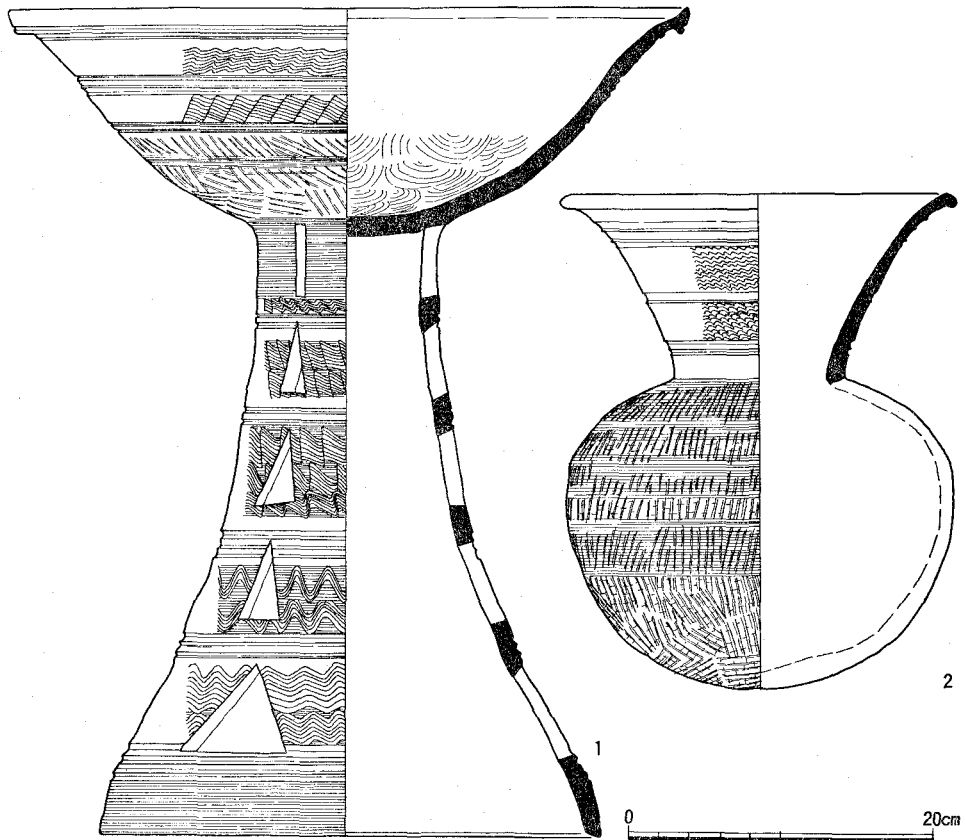


図70 天塚古墳出土の須恵器 縮尺1/5

3 主要古墳の動向

前節で、5世紀から6世紀の前半にかけての山城における前方後円墳の消長を述べたが、ここで、主要古墳の動向についてまとめてみる。5世紀前葉の前方後円墳の在り方は、前期にみられる勢力の優劣を覆す。すなわち、乙訓郡は、最古式の古墳の一つに数えられている元稲荷古墳⁽³²⁾(前方後方墳, 全長94m)に続いて、寺戸大塚古墳⁽³³⁾(前方後円墳, 98m), 一本松古墳⁽³⁴⁾(前方後円墳, 推定100m), 五塚原古墳⁽³⁵⁾(前方後円墳, 98m), 長法寺南原古墳⁽³⁶⁾(前方後方墳, 60m), 妙見山古墳⁽³⁷⁾(前方後円墳, 120m), 天皇ノ杜古墳⁽³⁸⁾(前方後円墳, 86m)など、100m級の前方後円(方)墳の稠密な地域であり、古墳時代前期における山城の最有力な勢力であった。男山丘陵にも阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺を納めていた八幡茶臼山古墳⁽³⁹⁾(前方後方墳, 50m), 石不動古墳⁽⁴⁰⁾(前方後円墳, 75m), 東車塚古墳⁽⁴¹⁾(前方後円墳, 推定94m), 西車塚古墳⁽⁴²⁾(前方後円墳, 115m)などの有力な古墳が、前期に存在しており、乙訓郡に拮

抗する一大勢力の存在を思わせる。一方、宇治丘陵では様相をやや異にする。当丘陵で最古と考えられている古墳は、径35mの円墳宇治一本松古墳⁽⁴³⁾である。その後、西山1号墳⁽⁴⁴⁾(前方後方墳, 75m), 同7号墳⁽⁴⁵⁾(前方後円墳, 60m), 庵寺山古墳⁽⁴⁶⁾(円墳, 径40m), 尼塚4号墳⁽⁴⁷⁾(前方後円墳, 37m), 尼塚方墳⁽⁴⁸⁾(方墳, 一辺40m), 金比羅山古墳⁽⁴⁹⁾(円墳, 径40m)などが相次いで築造される。しかし、向日丘陵や男山丘陵の古墳群と比較するならば、前方後円(方)墳の規模がひとまわり小型で、また、大規模な円(方)墳の存在が著しい。こうした主要古墳の墳形や規模の相異は、それぞれの地域の優劣関係を示しているといえよう。

このような経過の後に、5世紀の前葉には、突如として宇治丘陵の一郭を占める大谷川の扇状地に、久津川車塚古墳や芭蕉塚古墳などが築造される。一方、乙訓郡や綴喜郡では古墳の築造が停滞する。現木津町内において北へ流路を変える木津川は、狭隘な南山城を貫流し、男山丘陵北辺で桂川・宇治川と合流して淀川となる。大和の勢力が北方へ影響を及ぼそうとする時、この隘路を押えることが必要不可欠であったと思われる。弥生時代の集落分布に示されるように、元来可耕地が狭く、生産力の乏しい山城最南部に、椿井大塚山古墳⁽⁵⁰⁾や平尾城山古墳⁽⁵¹⁾などの規模・副葬品ともに有数の古墳が築造された理由に、要衝の制圧という軍事的側面を色濃くみることができよう。4世紀の段階で、三角縁神獣鏡や碧玉製腕飾類を配布されていた西山古墳群などの被葬者は、一地方の有力者に過ぎなかったが、5世紀の前葉に至って、かつて椿井大塚山古墳などの被葬者が担っていた木津川の管理・水運を引き継ぐことによって、巨大古墳の築造を可能にしえたと考えられる。無論、古墳群の西北に広がる沖積地の生産力も無視できない。

5世紀中葉は、3大河川の合流点近くに占地する恵解山古墳の存在が他を圧倒する。また、久津川車塚古墳が前期から後期にかけて形成された大古墳群の中に築かれているのに対して、恵解山古墳は向日丘陵を離れて単独で位置する。周辺には境野古墳群という小規模方墳群が存在するのみである。換言すれば、在地性が乏しいといえる。この古墳の造営された頃は、『宋書倭国伝』等に記録された倭の五王の時代である。順帝の昇明2(478)年の条に記載された倭王武の上表文には、「昔より祖禰躬ら甲冑を撰き、山川を跋涉し、寧処に遑あらず」と記されている。それを裏書きするかのよう、5世紀前半以降の古墳には鉄製利器・武具の副葬が顕著となる。また、埼玉県埼玉稲荷山古墳⁽⁵²⁾で発見された「獲加多支鹵大王」と象嵌された鉄剣も、『倭国伝』の記事を彷彿とさせるものである。交通の要衝に占地し、多量の武器を副葬し、在地性の乏しい恵解山古墳の被葬者にも、そうした武人の姿をみることができよう。

やがて、5世紀の後葉には向日丘陵の北縁、桂川右岸に古墳の築造が始まる。そのうち、唯一内容の明らかな穀塚古墳は、前方後円墳としては小型の部類に属し、また竪穴式石室を採用するという後進的な面をもつ。しかし、この古墳から出土した帯金具は、「將軍ないしは他の武官号に叙正されている可能性が大きい」人物に下賜されたものと推定されており、⁽⁵³⁾古墳の規模以上に被葬者の地位は高かったと推定される。山城の他地域では、穀塚古墳に比肩する古墳はない。そして6世紀以降、桂川左岸の太秦の勢力の優位が、徐々に固定化していく。6世紀前半では、向日丘陵南麓や宇治丘陵でもまだ前方後円墳が築造されており、太秦の勢力の影響は全域には及んでいなかったと推定される。しかし、6世紀中葉以降、前方後円墳を築造するのはほぼ太秦の地に限られる。文献によれば、5世紀後半に渡米した秦氏は、葛野大堰を造り、一帯の開発を推進するとともに、養蚕・機絹などを通じて富を蓄え、後に蔵司の実務を掌握したという。穀塚古墳には、根強く残る在地勢力と一線を画するために前期以来続く乙訓郡の墓域を離れて占地した新たな勢力の出現を想定することができる。秦氏の奉祭した松尾大社が、わずか1km余の卑近な距離に鎮座していることや、次代の太秦の変貌などから推して新たな勢力が秦氏である可能性は強い。

4 おわりに

以上、中期の前方後円墳を中心に山城の古墳時代を概観してきた。このうち、黄金山1号・2号墳、恵解山古墳、宇治二子塚古墳は各時期の最大規模、あるいはそれに近い規模の古墳である。しかし、いずれも大河川に近く占地し、前後に連なる系譜をもたずに単独で存在しており、在地性に乏しい。一方、5世紀後葉に桂川右岸に進出した新勢力の秦氏は、やがて太秦の地に占拠して山城一帯に影響を及ぼす一大勢力に発展してゆく。山城の歴史にとって、5世紀後葉は大きな転機であったといえる。

山城の古墳は、古代以来破壊され続け、古図に描かれた遺物のみ知られているものや、所在のみ確認されているものの、実態はまったく不明の古墳も数多い。また、京都大学教養部構内A P22区 of 古墳群のように、新たに発見されるものもあると思われる。すでに消滅した古墳や中小古墳、土壙墓や集落遺跡などの総合的な把握なくしては、歴史の表層をかすめてゆくに過ぎないことは認識しているが、力量不足もあって今回はそれらを取り扱うことができなかった。

末尾ながら、天塚古墳の遺物の紹介にあたっては、岡内三真氏のお世話になったことを記して、謝意を表します。

〔注〕

- 1 京都市編 『史料 京都の歴史 第2巻 考古』, p. 73, 1983年
- 2 梅原末治 「山城太秦巨石古墳」『近畿地方古墳墓の調査 3』(『日本古文化研究所報告 9』), pp. 75-81, 1938年
京都大学考古学研究会 『嵯峨野の古墳時代』, p. 37, 1971年
- 3 京都市編 『史料 京都の歴史 第2巻 考古』, p. 62, 1983年
- 4 梅原末治 「太秦村天塚及び清水山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第3冊』, pp. 35-37, 1922年
- 5 京都市編 『史料 京都の歴史 第2巻 考古』, p. 64, 1983年
- 6 山尾幸久 「朝鮮からの移住民」『共同研究日本と朝鮮の古代史』, pp. 167-173, 1979年
- 7 安藤信策 「南天塚古墳出土の新羅土器」『京都考古』 第21号, 1975年
安藤信策 「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 92-115, 1976年
- 8 高橋美久二 ほか 「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 第2分冊』, 京都府教育委員会, 1980年
- 9 梅原末治 「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第3冊』, pp. 71-73, 1922年
- 10 注9と同じ
- 11 梅原末治 「山城國久津川車塚古墳と其の遺物」『久津川古墳研究』, pp. 1-59, 1920年
- 12 平良泰久・近藤義行 「平川古墳群の復元」『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 I』), pp. 35-36, 1972年
- 13 平良泰久・近藤義行 「平川古墳群の復元」『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 I』), pp. 37-38, 1972年
- 14 戸原純一・笠野 毅 「巨幡墓の境界線崩壊防止工事の立合調査」『書陵部紀要』 第27号, pp. 92-96, 1975年
久保田健士 「黄金塚2号墳」『京都府埋蔵文化財情報 第3号』, p. 54, 1982年
京都市編 『史料 京都の歴史 第2巻 考古』, p. 79, 1983年
- 15 ここで用いた「有力な古墳」とは、一定地域の首長墓あるいはそれに準ずると考えられ、かつ、周辺地域の古墳と比しても遜色のないものをさす。具体的には、前方後円(方)墳の形制を採る、あるいは、径(一辺)30m以上の円(方)墳を想定している。
- 16 長岡京市教育委員会 『長岡京市文化財調査報告書 第8冊』, pp. 1-18, 1981年
- 17 堤圭三郎・高橋美久二 「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 38-39, 1968年
- 18 梅原末治 「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第2冊』, pp. 83-91, 1920年
- 19 平良泰久・近藤義行 「平川古墳群の復元」『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 I』), p. 37, 1972年
- 20 堤圭三郎 「青塚古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 20-26, 1964年
- 21 梅原末治 「松尾村穀塚」『京都府史蹟勝地調査會報告 第2冊』, pp. 47-53, 1920年
- 22 京都市編 『史料 京都の歴史 第2巻 考古』, p. 66, 1983年
- 23 注22と同じ
- 24 高橋美久二・平良泰久 「宮の平古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, p. 37, 1974年

- 25 向日市教育委員会 『物集女車塚古墳現地説明会資料』, 1983年
- 26 堤圭三郎・高橋美久二 「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 36-37, 1968年
- 27 堤圭三郎 「曹山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 48-54, 1967年
- 28 堤圭三郎 「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 58-65, 1965年
- 29 井上満郎・山田良三 「歴史伝承と古墳」『宇治市史 1 古代の歴史と景観』, pp. 230-232, 1973年
- 30 梅原末治 「太秦村天塚及び清水山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第3冊』, pp. 31-35, 1922年
- 31 京都大学文学部 『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第2部 日本歴史時代』, pp. 93-94, 1968年
京都大学考古学研究会 『嵯峨野の古墳時代』, p. 33, 1971年
- 32 西谷眞治 「向日町元稻荷古墳」『椿井大塚山古墳』, pp. 63-84, 1964年
京都大学文学部考古学研究室・向日丘陵古墳群調査団 「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』 54巻6号, pp. 116-139, 1971年
- 33 梅原末治 「乙訓郡寺戸ノ大塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第4冊』, pp. 36-43, 1923年
梅原末治 「乙訓郡寺戸大塚古墳」『京都府文化財調査報告 第21冊』, pp. 3-21, 1955年
京都大学文学部考古学研究室・向日丘陵古墳群調査団 「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』 54巻6号, pp. 116-139, 1971年
- 34 梅原末治 「川岡村岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第2冊』, pp. 53-59, 1920年
- 35 和田晴吾 「向日市五塚原古墳の測量調査より」『王陵の比較研究』, pp. 49-63, 1981年
- 36 梅原末治 「乙訓村長法寺南原古墳の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第17冊』, pp. 1-22, 1937年
大阪大学南原古墳調査団 「長法寺南原古墳」『長岡京市文化財調査報告書 第11冊』, pp. 1-32, 1983年
- 37 梅原末治 「向日町妙見山古墳」『京都府文化財調査報告 第21冊』, pp. 48-73, 1955年
京都大学文学部考古学研究室・向日丘陵古墳群調査団 「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』 54巻6号, pp. 116-139, 1971年
- 38 堤圭三郎・高橋美久二 「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 32-33, 1968年
- 39 梅原末治 「綴喜郡八幡町茶臼山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第4冊』, pp. 133-138, 1923年
- 40 梅原末治 「八幡石不動古墳」『京都府文化財調査報告 第21冊』, pp. 21-35, 1955年
- 41 梅原末治 「山城國八幡町の東車塚古墳」『久津川古墳研究』, pp. 61-70, 1920年
- 42 梅原末治 「八幡町西車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第1冊』, pp. 92-95, 1919年
- 43 山田良三 「山城宇治一本松古墳調査報告」『古代学研究』 42・43, pp. 14-22, 1966年
- 44 堅田 直ほか 「西山古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』, 京都府教育委員会, pp. 27-30, 1964年
- 45 吉村幾温 「西山古墳群(1・7号墳)」『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 I』), pp. 11-12, 1972年
- 46 平良泰久・近藤義行・下村晴文 「総論」『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 I』), p. 89, 1972年

- 47 山田良三ほか 「尼塚古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会,
pp. 66-100, 1969年
- 48 注47に同じ
- 49 吉本堯俊 「金比羅山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会,
pp. 51-57, 1965年
- 50 梅原末治 「椿井大塚山古墳」『椿井大塚山古墳』, pp. 1-61, 1964年
- 51 梅原末治 「棚倉村平尾ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告 第3冊』, pp. 79-82, 1922年
下村晴文 「平尾城山古墳」『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 I』)
pp. 73-76, 1972年
平安博物館考古学第3教室 『平尾城山古墳第1次発掘調査概報』, 1977年
- 52 埼玉県教育委員会 『埼玉稲荷山古墳』, 1980年
- 53 町田 章 「古代帯金具考」『考古学雑誌』 第56巻第1号, pp. 33-60, 1970年